

初年次におけるスピーチ演習科目の実践と成果

藤木 美奈子

キーワード：スピーチ、苦手意識、自信、自己表現

1. はじめに

桜美林大学で、スピーチの演習科目である「口語表現」¹がスタートしたのは、1989年のことである。国際学部が新設された折、外国語を使ったコミュニケーション能力を磨く前に、日本語で論理的に考え、自らの言葉で適切に表現できる力を養っていく必要があるとの考えから、日本語による「読み」「書き」「話す」能力を鍛える表現教育が導入された。

2003年からは、「口語表現」は、同じく表現科目である「文章表現」と並んで、全学共通の一年次の必修科目となった。当初から「話す」教育を「書く」授業とは別に、独立した科目として据えているのは、他大学の類似の初年次教育と異なる点であり、極めて特徴的と言えよう。

開設から四半世紀を経た「口語表現」の実践的な取り組みの現状を紹介すると共に、この授業によって学生がどのような成長を遂げてきたのか、授業に関するアンケート調査の結果をもとにして、この科目の意義と成果について考える。

2. 授業概要

「口語表現」は、人前での自己表現能力を磨いていく演習形式の授業である。スピーチの基礎力を養っていく初年次の必修科目の「口語表現Ⅰ」と、「口語表現Ⅰ」を履修済みの学生を対象にした、スピーチの応用力を培っていく選択科目の「口語表現Ⅱ」がある。本稿では、「口語表現Ⅰ」を取り上げる。

「口語表現Ⅰ」では、人前で話すことへの苦手意識を克服し、筋道を立てて聞き手にわかりやすく伝える力を身に付けていくことを目指している。多くの学生は、スピーチ初心者であり、人前で話をするに対して強い苦手意識を抱いている。この授業では、うまく話すことを求めるのではなく、スピーチに対する抵抗感や恐怖心を払拭し、自分らしく

伸び伸びと自己表現できるようになることを第一義的な目標としている。これからの長い人生を、一生人前が苦手という状態で終わらせることがないように、訓練の機会を与えることで、苦手意識の呪縛から解放していくのである。授業を通じて、人前が怖くなくなった、それほど緊張しなくなった、自己表現の楽しさが分かってきた、そんな風に学生に感じてもらえれば、「口語表現Ⅰ」の第一目標は達成できたと言える。

1クラスの学生数は25名前後である。学生は、与えられたテーマに沿って、3分程度のスピーチを行う。スピーチの様子はビデオ撮影され、音声はICレコーダーに録音される。聞き手であるクラスメートは、発表者のスピーチについて、良かった点やアドバイスを評価シートに記入していく。評価シートは回収され、授業の最後に発表者に渡される。発表者は、自分の発表映像や録音を振り返り、自分のスピーチについて自己分析する。クラスメートからの評価シートも参考にしながら、今まで気付かなかった自分の話し方の癖に気付き、良いところは伸ばし、反省点はどうしたら改善できるのかを探る。その内容をスピーチレポートとしてまとめ、翌週提出する。

口語表現の授業は、このようにスピーチの実施とレポート作成を交互に行ない、学生自らが主体的に学んでいけるよう構成されている。教員が良いスピーチのあり方を知識伝授するのではなく、教員はあくまでファシリテーターとして、授業の進行および学生のスピーチ発表の手助けをするに過ぎない。学生自らの気付きと、学生同士の相互評価によって進められる、自己発見型、全員参加型の授業である。

1学期15回の授業の中で、5回のスピーチ発表を行う。各回のテーマと狙いは以下の通りである。

- ①「自己紹介」(スピーチの基本構成を知り、人前で話すことに慣れる)
- ②「とっておきの情報を伝える」(情報を具体的・客観的に伝える)
- ③「忘れられない思い出・体験」(話のテーマを明確にし、効果的に描写する)
- ④「新聞記事についての自分の意見」(自分の意見を論理的に述べる)
- ⑤「就職の面接会場で」(将来ビジョンに即した、印象的な自己PRを行う)

3. 先行研究と本研究の視点

過去の研究により、スピーチの授業を受講することで、学生のスピーチに対する意識に肯定的な変化が起こったことが明らかにされている。

藤木(2007、2009)は、スピーチに対する苦手意識がどのように変わったかについて、

スピーチに対する自信の変化という観点から分析している。藤木(2009)は、スピーチに対する自信レベルを5段階に分け(5:非常に自信がある、4:少し自信がある、3:どちらとも言えない、2:あまり自信がない、1:全く自信がない)、アンケートを実施したところ、自信レベルの平均値は、初回授業での1.9から最終授業では3.4へと1.5段階上昇したとしている(有効回答数278名)。また、後続研究として、これ以降のクラスを対象とした藤木の調査では、アンケートの分析をより精緻なものとした結果、スピーチに対する自信レベルの平均値は、初回授業では2.3だったのが、最終授業では3.3となり、t検定の結果、この差は1%水準で有意であった(有効回答数158名)²。更には、藤木・前川・勝又(2010)の研究では、スピーチに対する自信レベルを4段階の評定尺度に分け(4:自信がある、3:自信がややある、2:自信があまりない、1:自信がまったくない)、アンケート調査を行った結果、初回授業時(有効回答数206)の平均値は1.51だったのに対し、最終授業時(有効回答数175)では2.51となり、t検定の結果、有意差が認められた。

このように、これまでの研究から、授業を通じて、スピーチに対する自信が上昇したことが明らかになっているが、「口語表現Ⅰ」の授業目的である「苦手意識の克服」については、学生に直接的に尋ねているものではない。そこで、本稿では、学生へのアンケート調査を通して、人前で話すことに対する苦手意識の克服という当科目の主要目的がどこまで達成されているのかを検証すると同時に、意識調査から得られた結果を計量分析しながら、どのような成果があったかをみていく。

4. 調査対象とその方法

2012年度春学期から、2015年度春学期にかけて、筆者が担当した「口語表現Ⅰ」の7クラス(いずれもリベラルアーツ学群)で、アンケート調査を行った。有効回答数は、130名(男子73名、女子57名)であった。

アンケートは、初回の授業と最終回の授業で実施した。過去の研究結果との比較をみるために、スピーチに対する自信のほどを初回と最終回の両方の授業で尋ねた。加えて、初回の授業では過去のスピーチ経験に関する質問を、また、最終回では授業効果をみる質問をした。

質問項目は以下の通りである。

Q1(初回 & 最終回):あなたはスピーチに対して自信がありますか?

Q2(初回):これまで人前で話す機会がありましたか?

Q3 (初回) : これまで人前で話す訓練を受けたことはありますか？

Q4 (最終回) : この授業は、苦手意識の克服に役立ちましたか？

Q5 (最終回) : 自分のスピーチが上達したと思いますか？

Q6 (最終回) : どの課題 (スピーチテーマ) がスピーチ力の向上に役立ちましたか？

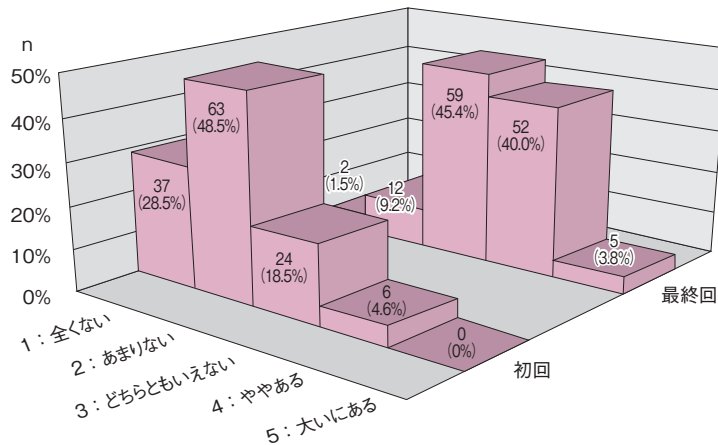
Q7 (最終回) : 「口語表現Ⅱ」など、スピーチの実践授業を今後も履修したいと思いませんか？

回答選択肢は、Q1のスピーチに対する自信を問う質問では、5段階の評定尺度(5:大いに自信がある、4:少し自信がある、3:どちらとも言えない、2:あまり自信がない、1:全く自信がない)を設定した。Q2、Q3の過去のスピーチ経験を尋ねる質問では、3段階の評定尺度(3:大いにある、2:少しある、1:全くない)とし、Q4、Q5、Q7の授業効果を見る質問では、選択肢は5段階(5:大いにそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない)とした。Q6のスピーチ課題についての質問では、5回のスピーチテーマそれぞれに対して、4段階の尺度を採用し、各スピーチテーマ別に記号で記入してもらった(◎:大いに役に立った、○:やや役に立った、△:あまり役に立たなかった、×:全く役に立たなかった)。全ての選択肢を5段階で統一しなかったのは、Q2、Q3の過去のスピーチ経験については、意識ではなく経験の有無を尋ねているため、より簡便な3段階の選択肢のほうが回答しやすいと判断したからであり、Q6については、5回のスピーチテーマそれぞれに関して似たような質問が続くことによる学生の集中力の欠如を防ぐため、記号で回答させることにし、その選択肢は4種類が妥当と判断したからである。

5. 調査結果

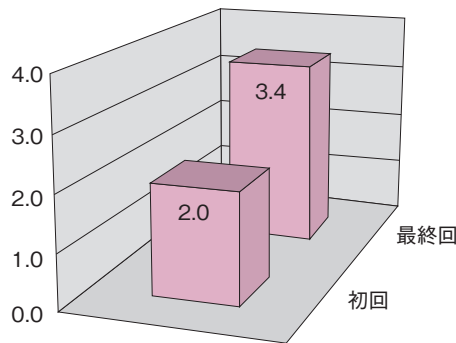
5. 1. スピーチに対する自信の変化

まず、スピーチの授業を15週間受けることで、受講当初と最終授業ではスピーチに対する自信がどのように変化したかを集計した。グラフ1は、Q1「あなたはスピーチに対して自信がありますか」の回答結果を、初回と最終回の授業別に分布図で示したものである。



グラフ1 スピーチに対する自信の変化

これを見ると、初回授業ではスピーチに対する自信が「全くない」と「あまりない」を合わせると77%だったのが、最終回では両者を合わせても11%に下がっている。一方、自信が「ややある」「大いにある」を合わせた割合は、初回の5%から最終回は44%へと大幅に増大している。



グラフ2 自信レベル平均値

表1 スピーチに対する自信の変化(初回と最終回の差) 検定結果

平均値	標準偏差	t 値	自由度	有意確率(両側)
1.362	.817	19.012	129	.000

全体の平均値でみてみると、初回の自信レベルは2.0であり、最終回は3.4と、1.4の上昇が見られた。t検定の結果、この差は1%水準で有意であった。

過去の研究結果と同じように、「口語表現Ⅰ」の授業を通して、学生のスピーチに対する自信のほどが向上していることが明らかになった。

5. 2. 過去のスピーチ経験との相関

次に、過去のスピーチ経験と、訓練の有無についてみる。Q2の「これまで人前で話す機会がありましたか?」については、「大いにある」が18.3%、「少しある」が71.4%、「全くない」が10.3%であった。Q3の「これまで人前で話す訓練を受けたことはありますか?」については、「大いにある」が2.4%、「少しある」が22.0%、「全くない」が75.6%となった。これを見ても、大半の学生は、これまでの学校教育の中で、人前で話す訓練を受けていないことが見て取れる。

スピーチに対する自信の程と、過去のスピーチ経験や訓練の有無には何かしらの関係性があるのだろうか。両者の相関を調べてみた。

表2 スピーチに対する自信と、過去の経験/訓練の度合いとの相関

	人前で話す機会があったか	訓練を受けたことがあるか
初回授業自信	.357 **	.348 **
n	126	127

**相関係数は1%水準で有意(両側)

表2で示したように、スピーチに対する自信と、人前で話す機会の多さ、および訓練の度合いは、両者共に、弱い正の相関がみられた。これまで人前で話すことが多かった人、もしくは、過去人前で話す訓練を受けたことがある人は、スピーチに対する自信が高い傾向があることが窺える。

5. 3. 授業効果

授業効果に関する以下の3項目の質問、Q4「この授業は、苦手意識の克服に役立ちましたか?」、Q5「自分のスピーチが上達したと思いますか?」、Q7「口語表現Ⅱなど、スピーチの実践授業を今後も履修したいと思いますか?」については、次のような結果が得られた。

表3 授業効果

選択肢	Q4 授業が苦手意識の克服に役立ったか		Q5 スピーチが上達したか		Q6 スピーチ授業を今後も履修したいか	
	n	%	n	%	n	%
大いに思う	52	40.3%	19	14.6%	22	16.9%
やや思う	64	49.6%	82	63.1%	59	45.4%
どちらともいえない	9	7.0%	21	16.2%	39	30.0%
あまりそう思わない	3	2.3%	7	5.4%	10	7.7%
全くそう思わない	1	0.8%	1	0.8%	0	0.0%
合計	129	100.0%	130	100.0%	130	100.0%

Q4「この授業は、苦手意識の克服に役立ちましたか？」の問いに対しては、「大いに思う」と「やや思う」を合わせた数値は、実に9割である。「口語表現Ⅰ」の授業目的である「苦手意識の克服」に関して、その授業内容が効果的であったことが窺える。

Q5「自分のスピーチが上達したと思いますか？」の質問に関しては、「大いに思う」「やや思う」を合わせると、8割近い学生から肯定的な回答が得られた。

Q7「口語表現Ⅱなど、スピーチの実践授業を今後も履修したいと思いますか？」については、6割以上の学生が、肯定的に回答している。「全くそう思わない」と答えた学生がひとりもいなかったというのも特徴的であり、スピーチの上達を感じられなかった学生であっても、スピーチの上位科目への関心が全くないわけではないことが見て取れる。

これらの授業効果に関する数値と、スピーチの自信のほどは、何か関係性があるのだろうか。両者の相関を調べてみた。

表4 スピーチの自信と授業効果との相関

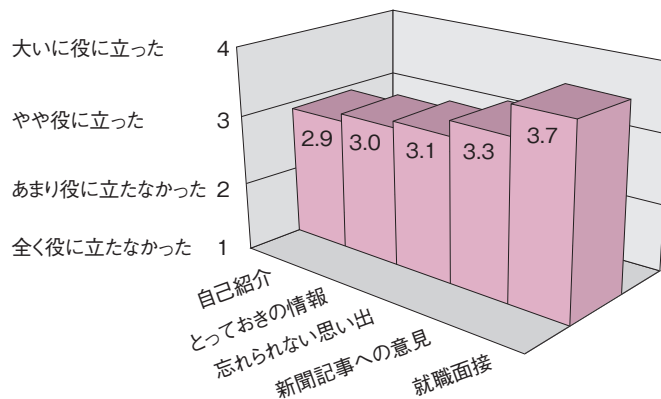
	苦手意識克服	スピーチの上達	今後の履修
最終授業自信	.379 **	.530 **	.315 **
n	129	130	130

**相関係数は1%水準で有意(両側)

最終授業でのスピーチに対する自信と、授業効果に関する項目との相関分析の結果、いずれも正の相関が見られた。中でも、スピーチの上達に関しては、やや強い相関が認められた($r = .53$)。スピーチに対して自信がある人は、自分のスピーチが上達したを感じていることが分かる。

5. 4. 役に立ったスピーチテーマ

Q6「どの課題(スピーチテーマ)がスピーチ力の向上に役立ちましたか?」に対しては、選択肢を数値化し(4:◎ 大いに役に立った、3:○ やや役に立った、2:△ あまり役に立たなかった、1:× 全く役に立たなかった)、各スピーチテーマにおける平均値をはじき出した。



グラフ 5 スピーチ力の向上に役立ったテーマ

スピーチテーマの平均値は、2.9 から 3.7 であり、いずれのテーマに対しても肯定的な回答となった。スピーチ課題は、学期はじめは易しいテーマから始まり、徐々に難しいものへとステップアップしていくが、もっとも難易度の高い面接スピーチが、一番役に立ったという結果が得られた。

6. 考察

6. 1 授業目的の達成度と授業の意義

本稿では、まず、「口語表現 I」の主要目的である「苦手意識の克服」がどこまで達成さ

れたかを検証してきた。今回のアンケート調査の結果から、「口語表現Ⅰ」を受講することで、スピーチに対しての自信が、平均値で言えば、2.0から3.4へと1.4段階上昇し、統計的に有意であることが明らかになった(グラフ2)。また、授業目的である、人前で話すことに対しての苦手意識の克服についても、9割の学生が、授業が役に立ったと答えている(表3-Q4)。スピーチに対して自信があるということは、裏を返せば、スピーチに対しての不安感がないということであり、それは苦手意識を持たないでスピーチが出来るということと同義と捉えられる。つまり、「口語表現Ⅰ」の第一義的な目的である「苦手意識の克服」は、これら二つの回答結果から、総合的にほぼ達成されていると言えよう。

受講当初は、スピーチに対する自信がない学生が77%である。一方、過去、人前で話す訓練を全く受けたことがない学生が76%であり、両者は奇しくも近似値となっている。また、スピーチに対する自信と訓練の有無とは、弱い正の相関が見られた。これまで人前で話す訓練を受けたことがある学生は、スピーチに対して自信を持ち、訓練の経験がない学生は、スピーチに対して自信がないことが示されている。

アンケートから明らかになった、スピーチ訓練の経験がない学生ほどスピーチに自信を持っていないこと、および「口語表現Ⅰ」の授業を通して苦手意識を解消していく学生が多いこと、これらの結果は、スピーチ力を養う「口語表現Ⅰ」の必修科目としての意義を、統計上からも立証していると言えよう。

筆者はこれまで数多くのクラスを担当してきたが、毎学期、初回の授業での学生の表情は冴えない。スピーチが好きか嫌いかを尋ね、その場で挙手してもらうと、概ね8割の学生がスピーチに強い嫌悪感と苦手意識を抱いている。一方で、人前で話す訓練を受けたことがあるかを問うと、全くないと答える学生が大半である。スピーチ経験がないが故の恐怖心であることを知らず、彼らの多くは、自分は生まれつき人前で話す才能が欠如していると思い込んでいる。日常会話力は何の苦勞もせず自然に身に付いたため、人前で話すことも同様に考え、特に訓練を受けずとも話せるのが当たり前であってそれが出来ない自分は才能がないと決め込んでいるのである。こうした状況があればこそ、スピーチ能力は生まれつきのものではなく、訓練によって獲得されていくものだということを知り、その力を段階を追って身に付けていくことの出来る「口語表現Ⅰ」は、初年次における全学必修科目として大いに意味を持つであろう。

学期当初は、この授業が憂鬱で仕方なかった、休みたいと思った、授業前にお腹が痛くなったなどと言う学生は少なくない。ところが、嫌々ながらも始めてみると、思っていたほど苦痛ではないことが分かり、少しずつ上達を実感しながら、当初は到底無理だと思っていたことが出来るようになる喜びを知る。自分を苦しめていたのは思い込みであったことが分かり、学期末には晴れ晴れとした表情で授業を終える学生は多い。アンケートの自

由記述欄には、スピーチ嫌いだった学生から、必修でなければ絶対にとっていないかったため、1年次の必修科目で良かったという声がいくつか挙がっていた。

6.2 スピーチ上達に繋がる授業スタイル

スピーチの上達については、78%の学生が上達したと回答している。苦手意識の克服同様、肯定的な回答が多かったことは、授業の成果が出ていると言えよう。また、最終授業でのスピーチに対する自信との関係において、やや強い相関がみられた(表4)。

授業効果に関する質問の中で、今後スピーチの実践授業を受けたいかという問いについては、62%の学生から肯定的な答えが返ってきている。中には、スピーチの上達について、「全くそう思わない」と答えた学生が、上位科目のスピーチ授業を履修したいと回答しているケースも見られた。自由記述欄には、「問題点が改善されなかったため上達したとは言えないが、口語表現Ⅱでもっとスピーチ力を伸ばしたい」とあった。このように、一学期の中で上達の手応えを得られずともそこで諦めるのではなく、上位科目の履修意欲に繋がっているのは、スピーチ科目の有効性を理解できたからではないだろうか。

では、これらの上達は、一体何によってもたらされたのだろうか。その背景として、「口語表現Ⅰ」独自の学習スタイルが挙げられよう。

前述したように、この授業は、学生主体の自己発見型授業である。教員は、あくまでファシリテーターとして授業の進行役に徹し、学生自らの気付きによってスピーチが上達するように設計されている。

ここで大いに力を発揮するのが、スピーチのビデオ撮影と音声収録による自己点検法である。スピーチが苦手なのは、圧倒的な経験不足に起因するが、一方で、どこをどう直したらいいか分からないからでもある。そこで、この授業では、自分のスピーチ中の姿を客観的、分析的に見ることで自分の話し方の特徴を知り、問題点を明らかにした上で、改善のステップへと誘導していく。

学生は、自分のスピーチ映像や音声を振り返ることで、自分では想像もしていなかったような、自身の話し方の癖を発見する。例えば、姿勢の乱れ、表情の乏しさ、声の小ささ、発音の悪さ、語尾伸ばしなどだが、スピーチに相応しくない話し方をしている自分の実像とここで初めて向き合うことになる。頭の中で描いていた自己イメージとあまりに違うため、「初めてビデオで自分が話している姿を見た時、自分では笑っていたつもりなのに全く笑えていなくて、ショックだった」などの感想が挙がってくる。このように、視覚、聴覚の両面から自己を客観的に点検し、そこでの気付きをレポートにしたためていくことで、自分の良かった点、改善すべき点が自ずと見えてくる。これらの発見は、次のスピーチに向けて、明確な問題意識を持って取り組む姿勢を生み出していく。このように、

発表、自己分析、目標設定、その実践という一連の繰り返し作業が、学生の自己発見、自己成長を促す基盤となっている。

もうひとつ、評価シートの存在も見逃せない。自分のスピーチが終わった後、クラスメートが良かった点やアドバイスを評価シートに記入してくれるが、これに励まされたという学生は多い。スピーチのあと、発表者はあそこが駄目だった、ここをもっとこうすれば良かったと、兎角うまく出来なかった点ばかりに目を向けがちである。そんな折、クラスメートからのコメントに救われ、安心したと述べる学生は少ない。評価シートには「良かった点」の項目があるため、どれほど失敗だったと思うような発表であっても、必ずクラスメートが何かしら良かった点を見つけ出してくれる。また、毎回クラスメートが自分の長所を指摘してくれることで、自己肯定感が高まったと振り返る学生も多い。こうした経験から、今度は自分が聞き手に回った時、積極的に発表者のいい点を見つけ出そうとする姿勢に展開し、これらの相互作用は、クラスの一体感や仲間意識の醸成に繋がっていく。

同時に、評価シートを記入することで、他者の発表を分析的、客観的に聞くことになり、聞き手にとってどういうスピーチが分かりやすく好印象なのか、聞き手の視点から見たスピーチのあり方を学んでいくことになる。

このように、相互評価システムは、互いを励まし合い、仲間との信頼関係を培っていき、個々人の上達のみならず、クラス全体で成長しようとする意欲に結びつく。自分だけではなく、クラスの皆と一緒に頑張っている空気が好きだったという声もよく聞かれる。

6.3 スピーチテーマへの評価

1学期中、学生たちは5回スピーチを発表する。各スピーチテーマがスピーチ力の向上に役立ったかどうかの問いに関して、4段階の評定尺度で聞いたところ(4:大いに役に立った、3:やや役に立った、2:あまり役に立たなかった、1:全く役に立たなかった)、いずれも肯定的な回答となった(グラフ5)。初回スピーチのテーマである「自己紹介」の平均値は2.9であり、第2回「とっておきの情報を伝える」では3.0、そして第3回「忘れられない思い出・体験」は3.1と、0.1ずつ数値が上昇している。第4回「新聞記事についての自分の意見」では更に上がって3.3となり、最終回テーマである「就職の面接会場」では、もっとも高い3.7となっている。これらの結果から、全体として、この科目のスピーチテーマの妥当性が認められたと言えよう。

スピーチテーマは、各回ごとに学びのポイントが異なり、少しずつ難易度が上がっていくようデザインされている。例えば、初回の「自己紹介」はさほど準備せずとも発表できるかもしれないが、第4回の「新聞記事についての自分の意見」では、気になった新聞記

事をひとつ選び、スピーチの中で記事の内容を要約発表した上で自らの意見を述べなければならないため、相応の事前準備が必要になる。このように、回を追うごとに課題が難しくなり、準備の負担も増えてくるのだが、難易度が高くなればなるほどスピーチ力の向上に繋がったという回答が得られた。中でも、面接スピーチは、4点満点中3.7点と、群を抜いて評価が高い。

ところで、初年次なのになぜ面接かという声もあろうが、「口語表現Ⅰ」での面接スピーチは、大学時代の早い段階で自分の進路を見据えて、職業観や将来ビジョンを養っている、それに応じた自己表現のあり方について考えるのが狙いである。従って、内定を取るための面接技術を習得するのではない。4年次を想定して模擬面接形式で進めていくが、数年後にはこれが現実のものとなることを体験させ、理想の職に就くためには学生時代にどんな経験が必要か、授業の履修計画はどうすればいいか、資格取得は必要かなど、より具体的な視点で、今後の学生生活を俯瞰することになる。

また、模擬面接では、面接官役も学生が担当する。それまでは、受験者の立場しか知らなかった学生が、反対側の企業の立場を経験することで、採用者の観点からすれば、どういう人物像が求められるのかなど、それまでとは異なった視点で面接を捉えることになる。この体験により、人事の人の気持ちがよく分かったという声も多い。

面接スピーチでは、志望動機、学生時代力を入れたこと、自己PRといった実際の面接でもっともよく聞かれる質問を投げ掛けているが、これらの問いにスムーズに答えられるようにするには、深いレベルでの自己分析が欠かせない。こういった作業を通じて、自己洞察や自己理解が進み、結果的に、精神面での成長も学生たちは手にするようになる。

特に今回の調査対象となったりベラルアーツ学群は、学群制を取っているため、専門分野を決めずとも入学できるが、その後も将来目標や自分の専攻を決められないまま漠然と大学生活を過ごす学生も少なくない。そんな中、面接スピーチでは、否が応でも自分の未来について考えざるを得ず、それまで放置してきた自分の将来像を考える契機になる。このテーマがスピーチ力の向上に寄与したという実質的な面のみならず、自分の生き方を見つめる回になったという点で、このテーマへの評価がより高いものとなったことが考えられる。面接スピーチを体験したことで、今の延長で毎日をただただと過ごしてはいけないと危機感を覚えたという感想もあった。

教員として授業を進めていく立場からは、1年生に職業観を持たせ、4年次をイメージさせながら模擬面接を受けさせるこの課題は、学生のモチベーションを鼓舞する上でもっとも苦勞するテーマではあるが、キャリアデザイン的な要素も含む重要なスピーチテーマが学生から高く評価されていることは、この課題を継続してきた意義がアンケート結果からも裏付けされたと言えよう。

7. 今後の展望とまとめ

「口語表現Ⅰ」が桜美林大学に設置されて25年、全学必修科目になってからは12年になる。話すことを書くことから切り離して、独立した表現科目としたこのような形は極めて珍しく、大学関係者からも大いに注目されてきた。今回のアンケート調査の結果から、「口語表現Ⅰ」は、人前で話すことに対する「苦手意識の克服」という授業目的を十分達成してきたと言えよう。

スピーチ能力は生まれつきのものではなく、やる気と訓練次第でいくらかでも伸ばせるものである。学生たちが抱く苦手意識は、未経験のものに対して自然に湧きあがる不安感の類であるにも拘わらず、最初から無理と決めて掛かっている学生の多さに、毎学期驚かされる。自分にとって未知の分野を、やったことがないから出来ないと諦めてしまうことは、未来の自分の可能性を閉じてしまうことになり、自身の将来性に対して罪深いとも言える。「口語表現Ⅰ」は、そんな学生の思い込みの呪縛を解き、自分の可能性に気付かせる授業でもある。

苦手なものを克服できた時、人は成長の喜びを味わう。自分の壁を乗り越えられた成功体験は、物事に対しての積極的な姿勢を生み、その人に自信を与える。当初は強い嫌悪を示していた学生が、数週間のうちに、普段の表情すら明るくいきいきとしたものへと変化していく幾多の事例を見てきた。「口語表現Ⅰ」をきっかけにして、大学生活が楽しくなったと報告してくる学生も少なくない。スピーチの授業でありながら、その効果はスピーチ能力の向上に留まらず、人間的な成長に繋がっていることを実感する。

その「口語表現Ⅰ」も、2015年度をもって、全学共通の必修科目としての位置付けを終了する。2016年度からグローバルコミュニケーション学群が開設されるが、そちらでは必修科目となっていないためである。しかしながら、急速に進む国際化、社会の多様化の中で、企業もコミュニケーション能力に優れている人材を求める傾向にあり、自分の意見を自らの言葉で的確に、且つ聞き手に分かりやすく述べていく自己表現能力が、ますます重要になってきていることに変わりはない。

大学のカリキュラム編成に合わせて、中長期的には、表現科目の改革の可能性も考えられるが、社会に出ても通用する自己表現能力の養成を大学の初年次教育で取り上げていく意味を踏まえながら、初年次におけるスピーチ演習科目としてのより良いあり方を、今後も広範な視点から模索していきたい。

注

1 1989年にスピーチ科目が設置された当初は「口語表現法」という名称だったが、その後、「口語表現」

と名称変更された。

- 2 藤木が2009年秋学期から2012年秋学期までに担当したスピーチ科目の7クラスを対象に調査。この結果は「大学教育学会第35回大会」(2013年6月1日～2日、東北大学で開催)で『初年次教育におけるスピーチの実践授業を通して — その意義と成果』と題して発表された。

参考文献

- 荒木晶子・藤木美奈子 (2011)『自分を活かすコミュニケーション力 — 感性のコミュニケーションと説得のコミュニケーション』実教出版
- 荒木晶子・穂田照子・尾関桂子・藤木美奈子・甕克実・山本薫 (2013)『伝わるスピーチ A to Z 口語表現ワークブック』実教出版
- 荒木晶子・藤木美奈子 (2015)『『伝わるスピーチ A to Z 口語表現ワークブック』の実践指導方法と留意点』実教出版(専門基礎ライブラリー『伝わるスピーチ A to Z 口語表現ワークブック』付録)
- 荒木晶子・甕克実・竹内幸子・横田智美・有村治子・尾関桂子 (2001)「日本語口語表現法の授業運営の仕方と実践指導方法」『Obirin Today』創刊号 pp.45-73
- 藤木美奈子 (2007)「スピーチに対する自信の変化 — 口語表現法の授業を通して」『Obirin Today』第7号 pp.49-68
- 藤木美奈子 (2009)「日本語口語表現教育の現状 — 『口語表現法』の授業から」『第25回関東地区大学教育研究会(大学教育学会関東支部) いまだからこそリベラルアーツ — 学士教育課程の構築に向けて — 総会・研究会報告集』 pp.47-57
- 藤木美奈子・前川志津・勝又恵理子 (2010)「スピーチに対する自信は何によってもたらされるか — 授業内容との関係から — 」『OBIRIN TODAY』第10号, pp.49-64